
天使じゃないって！

芭瑠堵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天使じゃないって！

【Nコード】

N2339B

【作者名】

芭瑠堵

【あらすじ】

主人公のウインは有翼族という、とても珍しい種族。今回の移転場所の森の教会で出会った青年との物語。人間と有翼族の祖先である『奇跡の鳥』と間には何かあったという話だが…。

第一話：転住、そして出会い

昔々のお話・・・。

あるところに、眩しいほど純白な鳥がいました。

その鳥は『奇跡の鳥』と呼ばれ、時代を渡ることが出来る鳥でした。ある時、その鳥は一人の少女と出会った。

鳥はその少女に一目惚れをしました。

けれど、所詮は人間と鳥：結ばれる事などできません。

鳥は悲しみました。

そして、心から神へ祈ったそうです。

『どうかお願いです…。

人間にならせてください：他は何も望みません。』

そんな一途な願いは、神様に届き叶えてくれたそうです。

翼は残したものの、人間の姿に変えてくれたました。

こうして少女に思いが届き、結ばれることも出来ましたとさ…。

「…めでたし、めでたし。」

「わあ〜良かったねえ！」

「すてき〜」

「おれ、かんどーしたっ…！」

「ちょっとー鼻たらしさないでよ！」

私がお話を読み終わると

子供らは、それぞれ感想をもらした。

今、私が話したのが私たちの先祖の話を絵本にした物。

そう：私たち、有翼族ゆうよくぞくはさっき話したとおり人と鳥が交じり合っ
てできた者。

人間の姿をし、背中には鳥の翼をはやした人間でも鳥でもない中間
の存在。

違った存在故にひっそり山奥に住むようにしている。

定期的にはれないよう、移動もしたりしている。

「ウインお姉ちゃん、ごほんよんでくれてありがとう！」

「たのしかったよ！また、よんでね」

「ああ、いいよ？また今度」

やったくと元気に跳ねて喜ぶ。

まったく：子供は無邪気でいいね。

そんな事を思いながら、子供たちを眺めていた。

「おおい！ウイン！！！」

空の上から大きな声で呼ばれる。

見上げると、そこには：

「あっ！スウ兄ちゃんだあ」

「な、なっ？しごとおわったの？？
これから、あそべる？」

「だめだめ、一度家に帰ってからな？」

「じゃーおうちできたんだね！！」

「おう、完成したぞ？」

「だから一度もどんなさい」

「「「はぁーい」」」

子供たちは素直に聞いて、家のあるところへ翼をはためかせ飛んでいった。

「お疲れ、スパーロ。」

「ずいぶん、早かったな？」

「まあな。早くやないと日が暮れるからって急いでやったんだよ」

ふうとため息をついて、スパーロは腰掛けた。

「…今日はまじめに働いたんだな？」

「そりゃーたまにはやるさ！」

「そーか…明日は雷雨になるかもな」

「し、失礼だな！ウインは！！」

「あははっ、いいじゃないか。珍しいのは本当のことだろう?」

「確かにいつもやんねえーけど…」

「ほら見ろ。だから、そう言われるんだ。」

こいつは、サボリ癖あるからな。

今日みたいに疲れるまでやるだなんて滅多にない。

幼い頃から一緒にいるが、昔も今も変わるところはなかった。

「ウィンも疲れただろ? 子供相手もさ。」

「いや、なかなか楽しいから大丈夫だ。

それにしても、結構この話はよがられるよな」

「ん?…ああ、この話かぁーそりゃ、綺麗にまとまってるからな。」

スパークはそう言って、絵本を開いた。

「『想いが届いて』ねえ…夢のある話だわ」

「確かに…でも絵本だからな。

”本当”の事なんて書けやしないさ。

あんなこと…なんてね」

そう…所詮、子供向けに作られた絵本。

本当の、真実は…

「…なんで、私たちは生まれてしまったんだろうな?」

「さあ…。」

これもまた、運命ってやつなんじゃねえの？」

「そうだな。」

こんな答えを聞いても意味ないことなんてわかってる。
私たちは、ただ…世界に存在するだけなんだから…。

「どーする？俺らもそろそろ、帰る？？」

「…いや、ちょっと出かけてくる。」

行く途中で綺麗な泉を見つけたんだ。

そこに言って、食料になりそうな物があるか見てくる。」

「それなら、俺もいくけど？」

「いや、いいよ。」

スパークは珍しく仕事したんだ。

疲れてるだろうから、先かえって休んでいろ」

そう言って、ローブを手を持ち

翼をひらいて飛び立つ。

一気に…空高く。

「…少しは、俺に頼れよ」

そのスパークの声は、私に届かなかった。

目的地の泉までは、それほど時間はかからない。
さっと地に降り立ち、ローブを羽織る。

：翼さえ隠せば、私たちも普通の人間と見分けがつかない。

「（それだけなのにな…）」

そんな思いにふけってる時間なんて、あまりない。
気分転換もそこそこにして、食料探しを始めた。

「やはり…綺麗な泉があると違うな」

そこは、私が見込んだとおり食料になりそうなものがたくさんあった。

泉には淡水魚たちが気持ちよく泳ぎ、あたりにある木々は美味しそうな木の実をつけている。

その周りに生えている草も食べられるものが多い。

ここは、結構な穴場だった。

後で報告しないとな。

：少しだけ、土産に持って帰るか…。

「（さて、そろそろ日が沈むし帰るか）」

リンゴーン

リンゴーン

「鐘の音…？」

近くに教会でもあるのか？

…いや、ここは山奥で町からかなり離れた所。

そんなところに人が住んでいるとも訪れるとも思えない。

それに空にいた時は見えなかった。

リンゴーン

でも、確かに聞こえる。

鐘の音が…。

私の足は迷わず音が聞こえる場所へ向く。

何故かその音色がとても心に響いたから…。

鐘の音が聞こえた場所に着くまで、それほど時間がかからなかった。

私が予想していた通り、教会はそこにあった。

木に囲まれて、隠されたように存在する教会。

古びてはいるが鐘が鳴っているということとは誰か居るのだろうか？

本来ならば、人間がいる場所へ自ら赴くのは危険な事…。

それでも私の手は教会の扉に手をかけた。

キィー…ッ

高い音を立てて扉は開く。

最初に目に入ったのは夕日に照らされて輝くステンドグラス。

少々欠けてはいたが、それが気にならないくらい綺麗だった…。

見入っていた私は、しばらく立ち尽くしていた。

そんな時だった…。

扉から、突風が吹き込んできた。

被っていたローブが宙に舞う。

「あっ…」

偶然にも取れてしまったローブ。

隠された翼がひらく。

ガタンッ

教会の奥の扉が開く。

出てきたのは金髪の青年。

私は油断をしていたせいか心臓が止まりそうなくらいドキッとした。

まさか、こんな…思わない事態になるなんて…。

人間に私の翼が見られようとは。

「あなたはっ?!」

「っ…!?!」

やばいっ…。

そう思った私は翼をひらき飛び立とうとした。

「やっと見つけた…天使様、待ってください!」

「えっ!?!…うわあっ!?!」

ドサッ

予想外の私への呼びかけに
じゅうたんに足を滑らせて転んだ…。
我ながら、情けない…。

「だ、大丈夫ですかっ天使様？」

私が転んだのを見て、慌てて駆け寄ってきた。
顔から見事に転んだ私は顔をおさえて、起き上がった。

「す、すいません。僕が声をかけたばかりに…」

「い、いや…」

何なのだろう？この人間は…？？

普通は驚き逃げるか、捕まえようと追ってくるかしかない。
なのにこの人間は私のことを天使様だとか呼んで
両方の行為どちらもせず、本気で私を心配しているようだった。
正直、拍子抜けして逃げる事も忘れるほど間が抜けた…。

「おでこが赤くなってる…。本当にすいませんっ、天使様にこんな
…」

「いや…え、えっと…お前、驚かないのか？」

「えっ？」

「私の背にはこの通り、お前らにはない翼があるのに…」

「驚くわけじゃないですか。天使様とは前にお会いしたのに」

その言葉に、驚くとともに疑問が芽生えた。

私はこの青年とあった記憶がない。

…というか、生きてきてこの方人間と接触はしたが一度たりともばれた事はない。

「お前に…？会った覚えはないが」

「ええ！忘れちゃったんですか？！

ぼ、僕ですよ！レガートⅡアクセントです！！」

「ぜんぜん、覚えないけど…」

「がーん！！ショックですよっっ」

効果音まで口に言ったレガート？はかなりのオーバーリアクションだった。

そんな事を言われても、知らないものは知らないし…。

なんだか、かなり落ち込んだ様子だった。

悪くないはずの私が罪悪感を覚えるほどに…。

「そ、そんな落ち込むなよ。人違いだろう？」

「いえ、絶対間違いありません！！

だって……」

勢いで行っていたレガートが急に黙った。

「だって…ってどうしたんだよ？」

「なんでもありません…。」

ともかく、あなたと昔…10年前会ったんだ…確かに」

最後のほうは、聞こえないくらい小さな声で話した。

さっきの落ち込んだ顔とは変わり、かなり悲しんでいる顔つきになった。

10年前…そうすると私が2つの時の話になる。

その時は、この大陸にも居なかった頃。

事実だとするには、到底無理な話だ。

そんな強く力説されても困るもの…。

「いや…本当に違うと思うぞ？」

「ああ、そうか！」

10年前ですから、きっと忘れているんですね…！」

「ええっ??？」

「しょうがないですよ。よく考えてみたら！」

「あの、ちよっ——」

「今日は…遅いですから、また会えますよね！」

もう一度この場所に来てくれたということは。

きっとたくさんお話をすれば思い出しますよ」

勝手にどんどん話が進められている。

そのペースに押し流されていく。

「もしよければ、明日にでも会いに来て下さいねっ天使様！
それでは、さようならですっ♪」

バタンッ

また奥の扉に消えていった。

「なんなんだ？ いったい…？？」

ポツンとまた、教会に一人取り残されてしまった。
まるで嵐が去ったという表現が正しい気がする。

この事は、とりあえず皆には黙っておこう…。
そう思った。

第一話：転住、そして出会い（後書き）

連載は初めてなので、緊張しますが
自分なりに精一杯頑張って書き上げたいと思います！

第二話：報告、思い返せば…

――帰って…。

私が集落に戻ると、宴会騒ぎになっていた。いつものことだ。

移り住むたびに宴会の場が設けられる。

まったく、大人は何を気楽にやっているのか…。

「おお！ ウインじゃないかあゝずいぶん、ヒック…遅かったなあ――いったい何してたんだあ？」

最初に声をかけてきたのは、何を隠そう自分の親父だ…。
かなり酔っている様子…。

「何って…ただ食料になりそうなもの探してただけで…」

「本当にそれだけかあ?? 怪しいもんだな―」

私は内心ドキッした。

酔っていても

勘は鋭いのか…この親父は…。

「本当にそれだけだ…何も怪しいことなんてない」

「ほーそうか。まーいいやあ…ひつくうあ……」

…やっぱ、ただの酔っ払いの戯言か…。
あせって損した。

本当に、食料の確認で何があったか
この酔っ払い当主に報告しても意味がない気がする…。
それは、明日にするか。

「ウィンッ！」

「あっ、スパーロ」

「何してるんだよ。遅いぞ！心配したじゃんかつ」

「悪いな…心配かけて。

結構いい穴場だな。少し、土産を採ってきたからスパーロにおすそ分けだ」

これで許せよと続けて言った。

「まったく…俺そこまで、子供じゃねえんだ。
物で釣られるわけないだろ…でも、サンキュ」

そういつている割には嬉しいそうに笑った。
自分でも少し自覚しているらしく、少し照れくさそうでもあった。

「ああ、そうだ。

スパーロの父上はどこにらっしゃる？」

「親父？

確か、俺んちにいると思うけど…」

「そうか。

スパーロの家はどこに建てたんだ？」

「まだ、見てなかったんだっけな
こっちだ！案内してやるよ」

「ありがとう」

ついでに自分宅が立った場所も教わり、スパークの父上…ジャクさんに会いに行った。

自分のため親父じゃ、話にならないからな…。

トントン

「親父、ウインが話があるって言ってるぜ？」

「そうか。入っていいぞ」

ドアをたたき、許可を得ると快くジャクさんは入れてくれた。
開けると、机にいっぱい資料が積み重なっていた。

細かい一族の事柄はすべてジャクさんがやってくださっている。

「ウインちゃん、お疲れ。」

子供達の相手は大変だったろう？」

「ふふっ、大丈夫ですよ？」

スパークと同じ様なことを聞いてきたので、すこしおかしかった。

「そうかい。ありがとうな、ウインちゃん。」

「しかも息子まで世話になってるからな」

「おいっ、それどういうことだよ！」

「お前は餓鬼だからな。子供とかわらんさ」

「なんだと、くそ親父!!！」

「そー言う前にウィンちゃんの様に大人にならんかっ」

「いでっ!!！」

机にあった本でスパークの頭をなぐる。

悔しそうににらみつけるが、かなわない事がわかっているため喧嘩沙汰にはならない。

「そういえば、私に用があったみたいだが何かな？」

「はい。先ほどまで食料の確保場所を見てきたのですがとてもいいところがあったので、報告しよう…」

「ああ、そうか。」

この事はウィリーには言ったのか？」

「いいえ。あの人は酔いつぶれているので、今言っても覚えていませんよ」

「それもそうだな。」

ウィリーとは私の親父のこと。

本当は、長である親父へ先に報告するのがスジだが

あの状態では、今言っても意味なんてありえはしない…。

だからとりあえず、親父の補佐であるジャクさんへ先に報告したのだ。

「報告、ありがとう。」

本当にウィンちゃんはしっかりしている。

スパーロに爪のあかを煎じて飲ませたいものだ」

「だから、俺の話をいちいち持ち出すな！」

こう言い合いをしているが、それは喧嘩するほど仲が良いというやつで

いつもジャクさんはスパーロを持ち出しているが、それは親しい故で…。

見ているこちらが微笑ましくなってくる気がする。

「では、明日。」

その場所へご案内しますよ」

「うむ。よろしく頼むよ」

「はい。」

…後、もう一つご報告が」

「何かな？」

「この近くに古びた教会があります。」

住んでいる様子はありますが、人間が出入りしている様子がありました」

「ほう…では、その場所も明日に教えてもらおう」

「はい、わかりました。

報告は以上です」

「本当に助かった。ありがとうな。

今日はもう遅い。ゆっくり休むといいぞ」

「ありがとうございます。

お言葉に甘えて今日は休みます。

おやすみなさい、ジャクさん」

「ああ、お休み…」

そう言ってスパークと部屋を出た。

その後、近くではあったがスパークに家まで送ってってもらった。

「近くなんだから送ってもらわなくてもよかったのに…」

「万が一があるからな。

それに送っていかないと親父が怖いしな」

「ははっ、本当にジャクさんに弱いんだな」

「しょうがないだろ。力だって頭だってかなわないのはもう分かっている。

…昔さんざんやりあったからな」

「まあ、そう理解しているだけでも大人になったんじゃないか？」

「そーだなー！」

ちょっと不機嫌そうに答えるスパーク。

やはり、子供扱いが嫌いのようだ。

それに比べ、私はずいぶん前から大人扱いされている。

こんな事を言ったらスパークに怒られるだろうが、正直うらやましく思ってる。

大人扱いの私には、それなりの責任と自覚。

甘えなんて許されない。

これからの有翼族を引っ張っていくのは、今後私になっていくのだから…。

「ありがとうな。わざわざ送ってもらって」

「別に。たいした距離じゃねえーし、気にするなよ」

「ふふっ」

スパークは何かとぶつきらぼうだが、根は結構優しい奴だ。

親父に言われたからと言っているがたぶん、自分自身の意思だろう。

「何、笑ってんだよ」

「いや…優しいなと思ってな」

「ば、馬鹿いうなよ！思ってもないくせにっ」

「ははっ、ばれたか？」

「…本当に思っただけーのかよ」

「嘘だ…。思ってるぞ…。ありがとう」

「お、おう」

「おやすみ、また明日」

「…おやすみ、ゆっくり寝ろよな！」

「…うん」

小さくうなずくとスパークはどこかへ行った。
きつと宴会だろうな。

暗い部屋に明かりをともして、ハンモックに乗った。
ゆらゆら揺れた。

…今日は、色々あった気がする。
特にあのレガートという青年…。

『だ、大丈夫ですかっ天使様？』

最初会った時の言葉。

私の事を天使様だと言っていた。

人間からすれば、白い翼をもつ私は天使に見えるのだろうか。
…だけど。

『驚くわけじゃないですか。天使様とは前にお会いしたのに』

レガートは確かにこう言った。

今、思い返してもその記憶に覚えはなかった。

『ともかく、あなたと昔：10年前会ったんだ：確かに』

10年前か：前にも言ったが、現在私の年は12歳。

2歳の頃などに会ったとはそうたいい思えない。

やはり、あやつの勘違いに決まっている。

「：レガートか」

でも：わからないけど、レガートと言う青年が気になってしょうがなかった。

もう一度会いたいとまで思ってしまった。

あの、少年のように無邪気に笑うあやつに。

何故だろう：？人間に接触するのは危ないことなのにな。

明日、もう一度あの場所へ行ってみるか。

危険調査のためなら、きつと：許されるだろう。

「誰に言い訳しているのだろうか？私は：」

誰もいない、部屋に私の独り言が響く。

：もう、寝よう。

今は頭が混乱しているだけだ。

だから、上手く考えられないのだろう。

そう思ったので寝ることにした。

明日になれば、きっとまた元通りの自分に戻れると思うから…。

第三話：再会、日常の朝食

朝が訪れた。

窓から光が差し、小鳥達がさえずっている。
そんな爽やかな朝…のはずだが。

「がああ…ひゅ…かがあ…」

「……はあ」

この親父のいびきで台無しとなった。
もういつもの事だが、ため息は毎度でる。
うるさくて嫌なので外に出ることにした。

「気持ちいいなあ…」

心地いい風がふきつける。

やはり、朝はいい。

…ちよつと散歩にでかけてみるか…。

今は翼を使わず、徒歩で出かけることにした。

「…やっぱり、綺麗だな」

昨日来た穴場にたどり着いた。

前にもまして日の反射できらきら輝いて見える。
歩き疲れたので、腰を落とす。

泉はとても澄んでいたので飲んでみた。

「おいしい…」

ここは未だ穢れていないようだな。
身体に染み渡る様な清さだ。

「そうでしょう？ ここのお水は絶品ですよね」

「ああ、とても綺麗で…ってうわあ?!」

「あ、あぶない!!」

バシャーンツ

「ああ、落ちてしまいましたねえ」

「……」

なんでこんな事に…。

急に声がしたから驚いてしまった…。

不覚にも泉に落ちてしまうとは。

「すみません、またご迷惑を…手を貸しましょうか？」

「…いいらない」

差し出された手、振り払って自分で立とうとした…が。

「あっ!？」

「あぶないですよっ。無理せず私に捕まってください」

「うう…」

水に濡れてしまった為、いつも以上のローブと翼の重さに耐えられず、またよろめいてしまった。

その所をレガートに支えてもらった。
情けない…。

「あはは、結構おちよこちよいですね」

「わ、悪かったな！」

「あわわ、怒らないでください。

いいじゃないですか？そんな所も可愛いですし」

「か、かか、かかかっ可愛い?!」

「ええ♪」

な、何てこと言うんだこやつは!!

そんな事さらっという奴、初めて見た…。

「そ、そんな事ない…」

「そうですか？可愛いと思うのですけどね」

「これ以上、言うな！」

言われなれてないせいでもあって、なんだか気恥ずかしい。

第一自分はあまり、女として見られていないからそうは言われない。

「…はい？わかりました。」

けど、ずいぶん派手に濡れてしまいましたね」

そう言って、レガートは私に自分の着ていたを上着をかけた。

「!？」

「今は春と言ってもまだ肌寒いですから、風邪を引いてしまつては困りますからね」

うわつと笑つてそういった。

心なしか、身体が温かくなった。

「もっと喋っていたいけど、着替えが先決ですね！

…また、今度会いましょう？」

そう言って、またレガートは自分から姿を消した。

「なんなんだ…いったい…？」

ぎゅつと上着を握り締め、見えなくなるまで見送った。

「くしゅん…とりあえず、帰るか」

やはり、風邪などひいてはいけないと来た道に戻る。

レガートの上着のぬくもりを感じながら…。

家に帰って、誰にも見つからないうちに上着をしまつて着替えた。
人間と接触したなんてばれたらただ事じゃすまないからな。

「ああー…頭いてえゝな」

のっそりと親父が起きて来る。

昨日は酔いつぶれるまで飲んでいたらしく頭痛を訴えた。

「自業自得だろう？」

まったく…どれだけ酒を飲んだんだ？」

「…うーん、覚えてない！」

「えばるな、馬鹿親父」

「ひどいなあゝお父さんに向かって…」

「近づくな、酒臭い!!」

「ウィ、ウィンちゃんがいじめるゝ」

「……」

こんな親父にかまっていたら日が暮れてしまう。

もう無視するしかないと思い、泣きまねをする親父を残して朝食の用意をはじめた。

朝食の準備が出来上がると同時に、ひょっこりと現れる人がいた…。父親と2人暮らしている私だが、その他にも訪問者が現れる。

「ウィンっ飯できたあ？」

「いつものことだが…なんで毎回来るんだ？」

あたりまえのように家に入ってきて言ったスパード。

「だって、親父の飯まずいし…あつ、ウィリーさんおはようございます！」

「おう、はよー」

スパードと話していると部屋から親父が出てくる。

「なんだあ？まだ、美味しく作れんのか？あいつは。はははっ」

親父とジャクさんは長と補佐の関係以上に古い友人らしい。なので気心というか、お互いのことをよく知っている。

けど…それを言うなら、私の親父はどうなる？なんというのかな…？

「自分の事を棚に上げて人の事を言うなんて筋が通ってないぞ」

そうそう、まさにその通り…って、ジャクさん?!…何時の間に来たんだろ？

「うおっ、ジャクか…驚かせるなよ！」

「俺はちゃんとノックをして入ってきた。だから、そう言われる筋

合いはないな」

そういったジャクさんは、いつもより碎けた感じで呆れて言ったが少し楽しそうだった。呆れて言ったが少し楽しそうだった。

「なんだよ、親父も食べに来たのかよ？」

「…こほん、息子に当てられて情けないがその通りだ。ウィンちゃん、すまないけど私にも食べさせてもらえんだろうか？」

恥ずかしそうにジャクさんは言った。

「いいですよ」

私は快く言った。

ジャクさんには色々お世話になってる。
今更人数が増えたところでたいした事はなかった。

「あー…でも、一人分ないなあ。“お父さん”は抜きにしないと！」

「ひ、ひど過ぎるぞ！」

いくら実の親子だってっ！！」

今度は本気で泣いて言った親父。はっきり言って引いた…。

「そーだぜ？、ウィリーさん可哀想だって」

「じゃ、スパークが遠慮するか？」

「えっ?! マジ?!」

「ははっ、冗談」

なんだよって感じでスパークは私を睨んだ。
…だけど、すぐ元の顔に戻った。

「ほら、冗談だって言っただろう?」

ジャクさんは隅で落ち込んでいる親父をフォローしていた。
はあー…すぐに拗ねるのだから。

「本当にあげないよ?」

「そ、それだけは勘弁!!」

私が言った言葉にすぐさま反応して、席についた。

「ははっ、やっぱりウィンちゃんの言う事は良く聞くなあ」

「女房に尻敷かれてる人っぽいですよ」

「まったくだ!」

ジャクさんとスパークは大声で笑った。
それに続いて親父も「まったくだあ!」と言って笑った。
恥知らず…。

心の中で思ったが、それは置いといて後2人分の用意にかかった。
メニューは至って簡単なものでチーズトーストを焼き、野菜スープ

を作っただけである。

それでも、3人は喜んで食した。

「ご馳走様。

いやあ、ウインちゃんは作る料理は上手いなあ」

「いえいえ、お粗末様です」

でも、言われてとても嬉しかった。

「マジ、美味かった！ありがとなっ！！」

スパークはそう言い残し、この場を去ろうとした…が。

「こらっまちなさい！

食べさせてもらったのだから、皿くらい洗ったらどうだ？」

「ええーっ！？」

行くところを遮られたうえに厄介事を言われたので嫌そうだった。

「ええじゃない。手伝って来い！」

「親父だって食ったじゃんか！ズルいぜ！！」

「私は色々することがあるのでな。はあゝお茶がうまいな」

「ひきよーものっ、自分だけ茶のんでゆっくりしやがって！！！！」

毎回、よくやるなと思う。

自分と親父ではやる気すらおきないからな。
この親子の言い合いが耳を通り過ぎる最中、私は皿を洗い場まで運んだ。

人間みたいに定住するわけではない私たちの家には台所などと言う部屋は存在しない。

なので川などで調達してきた水を使う。

外に出てたらいを持っていき、水を汲みあげといった容器で流し込む。これが、冬先だとかかなり大変な思いをする羽目になる。

幸い、今日は日和が良いし春先なので辛くはない。

がたっ

後ろからドアが開く音が聞こえた。

「あれ、スパロー？」

「俺も手伝う…」

さっきまであんなに嫌そうだったのにな。

いつのまにやら、気が変わったのか？

スパローは何故かガシャ、ガシャとなんだか割れそうな勢いで洗い出した。

「スパローッ、あまり乱暴にやるな。皿が割れるだろ?!」

「割れないから、平気だよ!!」

そういわれても説得力がない。
それにしてもなんだか：機嫌が悪い。
ジャクさんに、キツくどやされたのか？

皿洗いは犠牲者（犠牲物？）が出ずにすんだ。
洗い終わるとスパークは、「自分が持っていてしまうからいい」と言っ

さっさと部屋に戻っていつてしまった…。

一体何なんだ？

もしかすると私が怒らせることをやったのだろうか？
でも心当たりがなく、いつそう頭を悩ませた。

「あつ、ウィンお姉ちゃん！あそぼー」

「いいだろー」

「…ああ、うん。いいよ」

「「やったあ！！」」

子供達に誘われて

別にはすることもなかった私は子供達の遊び相手になることにした。

：スパークのことは気にかかるが、まあ大丈夫だろうと思い
他の子供達が待つであろう場所へ向かった。

第四話：隠鬼、昔の思ひ出

「今日は何して遊ぼうか？」

「おにごっこ！」

「おままごとしよ！」

「かくれんぼがいいなあ」

私が子供達に尋ねると自分がやりたいものを挙げる。
意見が結構別れたため、じゃんけんで決めることになる。
結果、かくれんぼになった。

「あまり遠くに隠れたら駄目だからな？」

「「はぁーい！！」」

元気な返事がこだまする。

最初は私が鬼になって、木に頭をつけ10数える。

「いーち、にいー…」

わぁーと散って、だんだん声が遠くなっていくのがわかる。
さてどこに隠れるのだろうか…？

「じゅーう！…つと、さてどこかな？」

数え終わった私は子供達を探しに出かける。

懐かしいよな…よく私もこうやって子供達のように遊んだ。
飽きもせず、ずっと外を駆け回っていた。

私が子供だった頃は、こんなに同世代がいなかった。
同じ年といえば、スパークくらいしかない。

2人で何するにも一緒にやった。

ああ…確かあんな事もあったなあ…ふふつ。

確か、あれは7年前くらいに――。

『ウィンっ、あそぼーぜ！！』

『うんっ！！』

いつものように遊びに誘ってきたスパーク。
いつものように誘いに乗った私。

今日もいざ行かん！と家を飛び出した。

『なにする？』

『うーん…かくれんぼがいい！！』

『じゃーおれがおにするから、ウィンがかくれて！』

『わかった！ちゃんと10かぞえてね？』

『おう！』

かくれんぼに決まって、スパークが鬼になった。
なので、急いで隠れ場所を探す。

『いち、にーい、さーん…』

だんだん数が10に近づいてきて焦る私。
キョロキョロあたりを見渡して探す。

『しーい、ごーお…』

半分数え終わろうとしていた時、いい場所を見つけた。

とても大きくて何百年も生きているであろう大樹木に…。
下のほうに小さな…ちようど、子供の私が入れそうな穴があった。
ここだ！と思い、私は入り込んだ。

穴は小さかったけど、入ると大きな空洞があった。

なんだか、隠れ家みたいで感動したのを覚えている。

これは、スパークに報告しなくちゃと思い外に出ようとした。

『あつ…でも、いまはかくれんぼしているんだっけ…』

そのことを思い出し、ぐっとなまする。

見つけたら負けだけど、早く見つけてくれないだろうか？とその
時は思った。

…けれど、こういうときに限ってみつからないもので。

まってもまっても、スパークはこなかった。

飽きてしまったのだろうか？

それで、探すのをやめてしまったのだろうか？

そう思ったが、それで出て見つかっても何となく悔しいのでやめた。
やっぱり見つけ出してほしかった。

だから、もう少しだけ待ってみることにした。
へんな意地で待っていると、その内待ちつかれて寝てしまった。

『あ…れ？もう、こんなじかんだあ…』

寝ぼけながらも目をこすっていった。

穴から差し込んできた橙色に近い赤い光で夕方だと分かる。

『スウ…あきらめちゃったのかも』

飽きっぽいから多分そう。

いつも遊んでいたから性格は良く知っている。

ずっと同じことをするのは嫌いなことも…。

そう…わかっていても、悲しかった。

自分はなんだか、忘れられているような気がして…。

泣きそうにはなったが、ぐっと堪えて外に出た。
すると…。

『——あっ！ウィン、いたっ！！』

『ス、スウ…？』

夕焼けに照らされて現れたのはなんとスパークだった…。

『どこ…かくれて…たんだよっバカア！！』

息を切らせて、区切れくぎれに言うスパーク。

今まで探してくれていたの？…と、思ったらとても嬉しかった。

さっきの悲しくてではなくて、嬉しくて涙がでそうだった。

『し、しんぱいしたんだぞっ!!…ぐすっ』

そして私は気づいた。

夕日の眩しさではつきりと見えなかったスパークの姿が見えてきた。泥だらけで、擦り切り傷があって…そして――。

『ないてるの…?』

『な、ないてなんか…ううっ…ないからな!!』

目が真っ赤だった。

零れそうだった涙をごしごし腕で拭った。

思いもよらなかった…。

こんなに一生懸命探してくれているだなんて…。

ずっと、諦めたと疑った自分が悪く思えた。

『ごめんね…』

『ずっと…もういい。ワインが…みつかったから』

鼻をすすりながら、スパークは笑った。

本当に…心底嬉しそうな顔で。

だから、私も釣られて満面の笑みを浮かべて笑ったと思う。

そこで、ふとあの樹木の穴の中を思い出す。

スパークに早く知らせたかった、あの秘密基地みたいな場所を…。

『ねえ! スウ。いいばしょをみつけたの!』

なんだかね、ひみつきちみtainところ!!」

『ほんとか?!』

『うんっ。こっちだよ』

涙なんか忘れて、私たちは穴へと向かった。
そして、二人で『すごいすごい!!』と騒いだ。

「うーん…ここか?…っていないか」

草むらを掻き分けて探すがいなかった。
うむむ。けっこう、鬼って難しいな…。

「あ、ウイン」

「えっ…スパーロ?」

スパーロの声がしたが、姿が見当たらない…。

「木の上だって」

「ああ…そこに居たのか」

太めな枝に寝転がっていた。

どおりで、辺りを見渡しても居ないわけだ。

「よっ…」と上から降りてくる。

ばさっと、ひとはばたき翼をして衝撃を減らす。

「何してるんだ？」

「子供達とかくれんぼをな」

「また遊んでやってるのか…面倒見がいいなー相変わらず」

「スパークは相変わらず、木の上で昼寝とは良いご身分だな？」

「いーだろ、気持ち良いんだから…」

ふわーとのん気にあくびを一つ。
いつものスパークだ。

「いつもどおりに戻ったな…安心した。」

「はぁ？何が…？？」

本人は、ぜんぜんわかってはいないご様子。

朝の皿洗い時の時はどうしたのだっと言いたいくらいだ。
はぁ…相変わらずだな、そのマイペースさは。

「なんでもない。」

それより、暇なら手伝わないか？鬼役」

「あーかくれんぼしてるんだっけ」

「いいだろ？一人じゃ、全員見つけられる自信がない…」

「別にいいけど。」

お前、隠れるの上手かったんだから見つけられると思うけどな」

「昔の話だろう。」

それに隠れるのと見つけるのは結構違うぞ」

「そうか？ 隠れるのが上手けりゃ、どこに隠れているか分かりそうだけど…」

「確かに一理あるが…。」

そういえば…スパークは見つけるのは昔から下手だったな」

さっき思い出していた出来事を振り返る。

あの時、隠れた場所はそう遠くなく、近いくらいだった。

今思えば、子供の目線ならあれくらい見つけられただろうにな。

そう思ったらおかしくて…ちょっとふきだして笑ってしまった。

「なんだよ…そんなに笑う事か？」

「いやなに…昔の事を思い出してな。」

…ほら、いつか隠れ鬼をやった時に私が見つからなくて泣いただろ？ お前」

「あー…そんな事あったかなー」

「まったく、そんな事言って…覚えているのだろう？ 嘘が下手だな」

「うるさいな。ほっとけ」

ふんつと言ってスパークはそっぽを向いた。

そーやってすぐ拗ねるんだから…。

「昔を掘り返すようで悪いが…

あの時、一生懸命探してくれた事すごく嬉しかったぞ」

独りで寂しくて、泣きそうになった私。

いつもならすぐ諦めてしまうスパークが、あの時はずっと探し続けていた。

「…そうかつ？」

さっきとはうって変わってはにかんで笑った。

「しょーがない！

手伝ってやるよっ鬼役」

「ああ、頼む」

そう言って私とスパークは歩き出した。

子供達を探しに…2人で。

第五話…会議、危険な役割

午前はスパークと共に子供達と遊び、あっという間にすぎた。時は昼の時間になる。

「ウインお姉ちゃん、スウ兄ちゃん、ばいばーい!!」

大きな声で、別れを告げる子供達。

お昼を食べるため、それぞれ家に帰っていった。

「さてっ、俺たちも家帰ってメシにするか!!」

「昼はちゃんと“自分の家”でたべるのか？」

「ー♪」

わざとらしく尋ねると

案の定、何も答えを返さずに口笛を吹きながら先へ行ってしまふスパーク。

この調子じゃ、また家にくる気だ…。

…そんな予想は当然の事のように当たった。

スパーク共々、ジャクさんも申し訳なさそうに來たのである。ジャクさんはいいとしても

スパークはもう少し遠慮と言うものを身に付けるべきだ! そう来るたびに毎度思うのだが、もうアイツの性格上諦めざる終えない…。

世間一般的に言う”ずうずうしい”と言う分類の奴だ。

朝と同じく4人で昼食をとる。

「ウィリー、そろそろ皆で話し合いがしたいんだが…」

「あ、ああーそうだな。」

午前はゆっくりとしたし、めんどーだがやるかあ」

やるせないと言った感じで、あくびを一つ。

まったくのん気というか気楽と言うか…。

「面倒とか言うな。」

長のお前が指揮とらずに誰がやるんだ？たくっ…」

「すいません、不肖の父がいつもいつも」

「いや、いいよ。もう慣れてるからな…」

本当に申し訳なくなってくる。

これがいつもの事と処理されてしまっているから、なおさらだ。

本来なら、拠点に着いてすぐにでも

食料地の確保やら、場所の安否などなど…

色々と調査して話し合わなければならぬ。

それなのに長がこのぐーたら親父だから、なにかと後々になっ
てい
る。

「午後にはちゃんとやれよな!!」

「わ、わかってるって！ウイン。

そんな父さんの事、睨まないでくれっ」

「睨まれるほどの事をやってる
…と言うか、” やらない ” のがいけないんだ!!」

「ウィンちゃん」と気色悪いくらいの声を出している親父を無視し、

「哀れだな…」とのスパークの意見もサラッと流して、昼食を続けた。

「それじゃーそうだな…食事が終わったら、皆をここに徴集して
会議という訳でいいか？ ウィリー」

「ああ…それでいい」

さっきの、私が無視した余韻が残ってか返事が沈んでいた。

だから…毎度のことなんだから、それくらいでヘコまないで欲しい…。

こんな感じで昼食は終わった…。

「全員集まったようだな。

それじゃー始めるぞ!」

午後、ようやく会議が開かれた。

子供以外は全員集まり、皆来たようだ。

この議題と言うか、報告は

それぞれの役割に沿って調べた、周辺の様子を皆に発表する。

だいたい、親父が二日酔いで、うなされていた間に皆調べてきたみたいだ。

さすが…というか、まともと言うべきか。

いかに、長なのに親父が動いていないかがわかってしまう…。

近年、親父が長になってからはお馴染みの事なので皆は特に言わない。

親父は本当に司会進行役をやるだけ。

事柄はすべてジャクさんが記録するので本質、あまり働いていない気がする。

たぶん、気のせいではないのだろうか…。

そんな駄目親父報告は置いといて。

各自の報告がだいたい終わった所を見計らって、私は挙手した。

「ウィンか、何かあるのか？」

「人間の事で…お話したいことが」

一瞬で空気が変わる。

場は張り詰め、皆は私の言うことに緊張感を覚えたようだった。

「ふむ。どういう事だか話してくれ」

「はい。」

先ほどの報告の食料が豊富な区域A1で人間を見つけました」

張り詰めた空気が、ざわめきに変わる。

動揺を隠し切れないようだ。

「静粛に！」

皆、落ち着くんだ…」

「続けてくれ：ウイン」

ジャクさんの一喝で、先ほどと同じ緊張感という名の静まりにもどる。

そうすると、親父が話をうながす。

私はコクンと無言でうなずいて話を続けた。

「一人だと思われませんが、はっきりとはわかりません。

その人間は、A1から南西へ約2, 3 km離れた場所の教会に入りしている模様です」

「例の教会か：ジャクから事前に受けたぞ
良く見つけたな」

「たまたまです」

あんな不快森に囲まれたところなんて簡単に見つかる訳がない。
私は運良く、かすかな鐘の音を聞いてたどり着けたのだから…。

「：惜しいですが、そのA1はあまり近づかないほうがいいでしょう」

悔しそうな感じでジャクさんは、状況結果を言った。

「そうだな…。

なるべく、他の場所で食料は補おう。

もし：それでも足りない場合では：誰かに行ってもらわねば。」

「その時は、私が行きます！！」

「ウィ、ウィンっ?!」

隣で聞いていたスパークが私の答えに驚きを漏らす。
まさか、ウチが立候補するなんて思わなかっただろう。
辺りもそう思ったのか、また一気にざわめきがした。

「ウィンちゃん、やめといった方がいいよお」

「そうだ。何も、若いモンが行くまでもない。
ここは大人に任せて…」

「そうだぜ! ウィン、皆の言う通りだってっ」

辺りが言う中、私の意志は変わらなかった。

「ウィン、何故お前が、行こうとする?」

「私は一度行ったことがあります。
そのA1区域にも教会にも…周辺の地形はわかっています。
…それに、私は皆の役に立ちたい!!」

「…そうか。じゃあ、任せるぞ?」

「はいっ、お任せを」

「よっし…これでだいたいは決まったな。
あとは各自、問題点があったら私の所かジャクの所へ知らせに来るよう」

「以上だ! 会議を終了する」

こうして、会議は慌しく終わっていった。

その後、私は昼食の食器を洗っていた。

これが終わったら荷物整理をしないと…などと考え事をしながら。

「本当に大丈夫なのか?!」

なんなら俺もついてくぞ!!」

「…はあ、大丈夫だって

そんなに心配されるほど危ない所じゃないって」

「だってなあー?!」

人間がいるんだぞ? あぶねーだろ!」

「そーだけど…」

手を動かしながらも、スパークの問いに答えを探していた。

一人と私は断定したが、それが合っているとも限らない。

例えそれが合っていたとしても、その人物が何を持っているかわからない訳だ…。

「でも、2人も行ったらバレる可能性が高くなるし

やっぱり単独で行った方がいいと思うんだ」

「そーだけど!!」

「大丈夫。

そんなに心配しないでくれ、スパーク。

私はやりたいと思ったし、あんな親父も信頼して私に任を任せてくれた

この役、まっとうしたいんだ…」

「……わかった。

ウィンがそこまで言うんなら…」

「ありがとう、スパーロ」

「けどっ、無茶は禁物な？

一人で危ないのは確かだからな！」

「ああ、わかってる」

「ふう…しーうがない。俺が折れますか」

不満はまだありげだが、なんとか納得してくれたみたいだ。
よかった…。

「あっ、でも！近くまでは同行するからヨロシク」

「はいはい、わかった」

本当に心配性だな…スパーロは。

なんだかおかしかったし…嬉しかった。

第五話…会議、危険な役割（後書き）

今回、実はやたらぐーたらで駄目親父の見せ所がメインです（笑／微嘘

ウィンとあの青年のレガートの接点がよくやく多く出せそうな展開に持ってこれました！

なので！前までは、幼馴染のスパロがちょい多かったです

本格的に、レガートとの絡みがでてくると思います（たぶんこう、ご期待！！

第六話：夜更、分かり合う最初の一步

会議が終わり、時は夜。

外は静まり返り、闇に包まれた。

私は寢床に仰向けになって、またあの青年の事を考えていた。

あの青年が言っていた：自分の事を”天使様”だと。

普通はそんな事を言って喜ぶ者はないだろうな。

例え、人間が作った仮想な人物に似ていたとしても
本当に現れたら、気持ち悪いと思うのが普通だ。

今まで、そうだった。

人間に見つかるたびに、引かれるか追われるか。

どちらかしかなかった。

けれど、あの青年：レガートは違った。

あんな嬉しそうに私のことを”天使”だといひ。
手を差し伸べた、あの泉の時。

『あはは、結構おちよこちよいですね』

そう言って、あいつは笑った。

なんであんな人間がそんなに気になるんだ？

普通の反応と違ったからか？

：わからない。

悩んでいても一向に答えなど出なかった。

外へ出て頭でも冷やしてこよう。

それが一番いい。

そう思って、ローブを羽織り夜中に一人で外へを向かった。
部屋のろうそくを片手に、歩き出す。

本当は、飛べたらさぞ気持ち良いだろうが
どうも夜は視力が落ちる。

たぶん、慣れれば多少は見えるだろうからゆっくり歩きで行く事に
した。

念のためを思って、ろうそくだけは持ってきた。

「いい気持ちだな…」

程よい、風に当てられて心地良くなる。

少しだけと出たものの、時間を忘れて

一歩、二歩、三歩…と足はどんどん進んでいく。

行き着いた先はあの泉だった。

だいぶ歩いてきたためか、視界が先ほどより良くなった。

いや、月明かりが泉に反射して光っているからかもしれない。

その幻想的に見える風景をしばらく眺めていた。

とんとん

肩に何かが触れた。

さっと振り向く。

「こんばんわっ♪」

「——っ?!」

まさか、人が居ると思ってもない。

声も出ないくらい驚き、おもわず身構える。

「あ、そんなに警戒しないで！」

僕です、僕。レガートですよ？」

「…レガート？」

「そうですよっ。

すいません、そんなに驚くとは思わなくて
申し訳ないです…」

今にも泣きそうなくらい悲しそうな顔で謝ってきた。
弱った…まるで、子供を泣かせてしまったくらいの罪悪感だ。

「い…いや、別に…」

「ゆ、許してもらえるんですか?!」

「あ…ああ…」

あんな顔されたら、誰もが許すと思うぞ。
というか許さざるおえないというか。

「はあ…良かった」

すごく安心したといった感じで
レガートは胸に手を当てて言った。

「天使様も夜のお散歩ですか？」

「…そうだが」

「僕もなんです！

気持ち良いですよね」

そう言って、背伸びしてからレガートは泉の近くに腰掛ける。
にっこりと微笑みながら、手招きをする。

つまりこれは隣に來いということなんだろうな。

拒否する訳にも行かないので隣に座った。

「ねえ…天使様

まだ僕の事、思い出せませんか？」

静かにゆっくりと語りかけるように言うレガート。

その言葉には悲しみが感じられた。

「…思い出すも何も、人違いだ

お前は10年前に会ったと言ったな？

10年前では、2つで赤ん坊も同然だ」

どうせ、会ったというのだから

その時同年代の娘であろうな。

「天使様って年をとるんですか?!」

ずるっ!!

あまりにも予想外な事を言ったので
思わず前のめりになる。

「とるに決まっているだろう!!」

「そ、そうなんですか…驚きですねえ」

こっちの方が驚いたぞ。

「お前は私を何だと？」

「天使様でしょう？」

神様に仕える従者のお方で…」

「そんな訳あるか!!」

天使様だとか言うのはてっきり言葉の綾かと思っていたのに…。
この様子だと、本気で信じているよな。

「夢を壊すようで悪いが、そんな小奇麗な者じゃない
人と鳥の間に生まれた一族さ」

「そうなんですか…では、僕が会ったのは…？」

「幻か、それとも同じ一族のものか…どちらかだろうな
少なくとも私ではない」

「そう…ですか」

本当に違うとわかったのだろう。
かなり落ち込んでいる様子だ。
なんだか、かわいそうな気がしてきた。

「まあ…その、なんだ。

あまり、落ち込むなよ？」

そういつてレガートの肩にポンと手を置いた。

「…ええ、大丈夫です！

これくらいではくじけませんよっ」

手の拳を握り締め、気合を入れる。

そんな姿が笑ってしまいうくらい面白かった。

「ありがとうございます！たっ天使様！

僕、元気が湧いてきました」

「それは良いが…」天使様”はよしてくれ
私には…ウィンという名があるから」

「ウィンさん…いい名前ですね」

「そ、そうか？」

「ええ！とつてもっ」

「…ありがとう」

そよ風くらいの風が私たちを吹き付ける。

ろうそくの炎が揺れる。

ふと、空を見上げると月は大分落ちていた。

「そろそろ、帰らねば」

「あっそうですか…もう、遅いですしね」

寂しそうに笑うレガート。

なんだか、名残惜しそうだった。

しょうがない…。

「また、会いに行く…教会に。いいか？」

「え、ええっもちろんいいに決まってますよ！

もっとてん…いえ、ウィンさんとお話もしたいですし

正午にあの場に居ますからいつでもいらっしゃってください」

「わかった」

そう返事してから、私は背を向けて歩き出した。

今度は、ちゃんと会える。

そう思ったらすこしだけ楽しみだった。

第七話：教会、彼の思い出の場所

「……眠いな」

朝日が顔を差す頃、私はいつものように起床した。

昨日は……寝たのはもう夜が明けていたので今日というべきか。寝るのが遅かったためか、ちょっと気だるさを感じていた。

けれど、朝食を作るのが私の役目。

それはどんなときでもまっとうしなければな。

昨日なんて、特にそうだ。

自ら出かけたのだから…。

そして…レガートに会ったのだ……。

「ふわあ…：ウィン、朝食……」

「はいはい。」

もう直ぐに出来るって」

相変わらず、平和そうにあくびをして朝食をねだる親父。

そんなご要望を早く済ませるためテキパキと進めた。

今日のメニューは、木の実炒め。

ここで取れた新鮮な食材で作ったからきつと美味しいだろう。

それを盛り付け、テーブルに並べていく。

そう、4人分……。

「腹減ったあゝウィン、今日は何?？」

「:すいません。またお呼ばれにきました」

ほうら、来た。

ちょうどタイミング良くくるスパイロ。

そして後から続いてジャクさん。

「おーおー、良く来た！

さ、食ってけっ！！」

さも自分が作った口ぶりの親父に呆れる。

もう日常だからつつこむまい……。

こうして朝食は、わいわいがやがやと過ぎていった。

そして、昨日レガートと約束をした正午へと時間は近づいていった。

「親父、ちょっと出かけてくる」

「昼食はどうするんだ？」

「テーブルにもう作ったの置いてあるだろう」

「俺たちのことじゃない、お前の事だ」

「弁当もったから、大丈夫

じゃ、行ってくるっ」

「……？」

ああ、気をつけろよー」

「はーい」

そう、親父に伝えてから

私はあの教会へと向かった……。

慎重に足を忍ばせて、教会へと近づいていく。

草陰から、様子を伺うとそこにレガートが居た。

どうやら、本を読んでいるようだ。

私が出てきても気づかなかった。

「…おい、レガート？」

「……」

あれ…反応がない……？

もう少し、近づいてみると理由がわかった。

「……すう」

「なんだ…寝ているのか」

椅子に腰掛けた体制で本を読んでいる途中に寝てしまったらしいな。
本を開いたまま、下を向いて寝ていた。

私と同じく、夜更けに出歩いていたんだものな。

私は、隣に腰掛けて寝顔を伺った。

気持ち良さそうによく寝ている。

確かに、ここは日がちようど良く当たって心地がいい。
昼寝するには最高の場所だな。

そよ風がすうーと吹く。

私の髪がレガートの頬にかかる。

…すると、その感触に気づいたのか少し動く。

「…うう…ん…あれ？」

「起きたか…」

「う、ウィ…ンさん?! 来てたんですかつ
すいません、僕寝てて…」

「かまわないさ

昨日、遅かったしな…」

寝ぼけから、慌てふためく表情が面白くて
あやうく、ふきだしそうになった。

「…それにしても、さっそく来てくれて嬉しいですよ
さあ、中へどうぞ」

「ああ」

レガートに促されるまま、中へ入った。

教会に入っすぐは、少し荒れているが
奥の部屋はキッチンと整備されていて綺麗だった。
その事を口にしたと、レガートは説明してくれた。

「ここへは、たまに遊びに来るので
この部屋だけはと片付けや掃除はしたんですよ」

紅茶や茶菓子をだしてくれた後、レガートは続けてこう話した。

「…この教会は、私の家みたいな物でしたので」

「…家？」

「ええ、十数年くらい前は教会兼孤児院だったんですよ
それで僕もここに引き取られて成人になるまでシスターに育てら
れたんです」

「そ、そうなのか…」

「どうしても忘れられなくて…
だからでしょうね、時々ここへ足を運んでしまうのは」

レガートは遠い目でそのことを語っていた。
壊れて古びた教会に通う理由はそれだったのか。
なんだか、私まで寂しいような感覚になる。

「まあ、僕が町で孤児院を引き継いだので
残った子供たちはバラバラにならずにすんだのが幸いでしたが」

「レガートが、今やっているのか？」

「はい。」

やっぱり、自分と身の上が同じ子が寂しさを感じないためにも
こういう場は残さないと、大人になって開いたんですよ」

「…そうか。」

優しいんだな。レガートは」

なんとなく、雰囲気的に良いやつだと思ったが
またこいつの話を聞いて更にそう強く思った。

「いいえ、そんな大した事ないですよっ」

恥ずかしそうに、頭をかいてごまかしたレガート。

うん…やっぱり良いやつなんだな。

そう私が思ったとき……。

ぐうぐう

「……あ」

「…お腹、減ったのか？」

「え、ええ…」

虫の音はレガートで

また、顔を赤くしてそうだと答えた。

そこで、私はお弁当のことを思い出したので差し出して…。

「よかったら、食べるか？」

「えっ？ いいんですか…?!」

「ああ、たくさんあるしな
分けてやるよ」

「うわゝありがとうございます!!」

そんなわけで、私の作ってきたお弁当でお昼にした。
多めにつめておいて正解だったようだ。

レガートは、美味しい美味しいと絶賛しながら勢いよく食べた。
そのがつきようは、スパークにも劣らないだろう…な。

「ご馳走様でした!!」

「お粗末様」

「ホント、美味しかったです！

ウィンさんは料理がうまいんですね！」

「毎日、作っていれば嫌でも上達するさ」

「そうなんですか？

でも、すごいですよ！」

「…ありがとう」

ちょっと褒めようが大げさだが
これだけ、喜んでくれれば嬉しく思うだろう。

パッポーパッポー

部屋の鳩時計が1時を知らせた。

「ああ、もうこんな時間なのですね…

天使の館に戻らないと」

「どうやら”天使の館”というのは孤児院の名前らしい。
なんだかレガートらしいネーミングだなと思った。

「それなら、失礼するよ」

「すみません。

なんだか、追い出すみたいで」

「かまわない。

私もそろそろ、もどらないといけないし…」

あまり、家を空けると怪しまれるからな。

人間のレガートと会っていたなんて知れたら大目玉だ。

「それじゃ、お弁当ご馳走様でした。

できれば…また、食べたいです!」

「はは、わかった

また持つてくるよ…」

「わぁ〜楽しみにしてます!!
それじゃ、またっ」

こうして、レガートと別れた。

なんだか今日一日でかなり仲良くなれた気がした…。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2339b/>

天使じゃないって！

2010年10月10日19時57分発行